

# 自己と利益

——利己と利他の区別を超える——

松浦勝次郎

## 目次

- 一、はじめに
- 二、利己と己利
- 三、動物行動の利己と利他
- 四、生命体としての自己と非自己
- 五、意識の主体としての自己
- 六、自己意識の変革
- 七、己利の追究
- 八、むすび

## 一、はじめに

最高道徳実行上の基本的な課題の一つは、知徳一体の心の働きとはどのようなもので、それはどのようにして実現されるかという問題である。

通常は、人間の科学的知識と道徳的判断は一体のものではない。したがって、知徳一体の心の働きは、すでに習得した知識と道徳の改革と、それらの統合という過程を通して実現される。そのような過程の基礎には、道徳の科学的根拠づけ、あるいは科学的知識の道徳的根拠づけという志向がある。そのどちらについても、人間の道徳性および人間社会の道徳律についての科学的理解がその重要な基礎となる。

一般に、人間の道徳性の基礎は、利己性の克服であり、道徳心は利他的な行動によって表現されると考えられ

ている。したがって、道徳性の観念の根幹には、自己・非自己の区別と利益の観念とがある。

近年生命体としての人間に新たな目が向けられるようになり、人間自身についての科学的な知識が急速に増大し、その面からの人間理解が深まりつつある。それと併行して、機械と異なる生命の本性が重視されるようになってきた。機械は外から組み立てられるものであるのに対して、生命体の本性は内から調和を求め、自らを更新し成長することにある。また、生命の一体性と相互依存関係についても理解が深まり、全体的・包括的な見方が重視されるようになって、その面からも自己・非自己についての基本的な意識が大きく変革しつつある。

本稿では、道徳実行の動機および意味についての理解を深めるために、最近の研究の成果を手がかりとして、「利己」と「利他」、またその根底にある「自己」と「利益」について、どのような科学的理解ができるかについて考察する。これから広く一般に受け入れられる理解がどのようなものになるかという視点からも、その問題を考えてみたい。

さらに、「自己」についての科学的理解を基礎に、最高道徳実行の動機にかかわる問題として、「利己」と「己利」における「自己」と「利益」について、また目的としての「己利」の意味についても考えてみたい。

特に本稿では、『道徳科学の論文』と近年刊行された三つの著書、『利己的な遺伝子』（リチャード・ドーキンス）、『免疫の意味論』（多田富雄）、『自我の起原』（真木悠介）を手がかりとして、上記について考察する。

## 二、利己と己利

まず第一に、『道徳科学の論文』では、自己が、自然と社会の広いつながりの中でとらえられている。<sup>(1)</sup>

それと同時に、『論文』第二巻では、「最高道徳実行の目的」として、「人格と肉体と両者併せて尊ぶ」（『論文』

⑨三三三頁）とあり、また「最高道徳実行の根本原理」として、「深く天道を信じて安心し立命す」（同二八五頁）、「現象の理を悟りて無我となる」（同二八六頁）、「自ら運命の責めを負うて感謝す」（同）の三箇条の格言があげられていて、「信じ」、「安心立命し」、「悟り」、「責任を負い」、「感謝する」、道徳実行の主体としての、また目的としての自己が、明確に意識されている。<sup>(2)</sup>

道徳実行の主体としての自己は、宇宙（神）の一部であり、それは精神と肉体から成る個体であるが、その自己は不完全なものであり、その不完全性を指摘し説明するために、自我、利己主義、利己心、利己的などの語が多く用いられている。「道徳は犠牲」であるから、利己心の克服が道徳実行の基礎となるが、犠牲・利他の行為の精神的基礎は「他を救うにあらずして己れを助くるにあることを悟る」（『論文』⑨一九二頁）とある。

「自己の最高品性の完成のほか、自己の利益となるものはない」（『論文』⑤三三〇頁）として、「己利」（聖人の利己）が、現代人の「利己」とまったく異なるものであるとされている。<sup>(3)</sup>「己利」と「利己」はその目的としての「利益」が異なるが、その前提としてそれぞれにおける「己」にも基本的な相違がある。

最高道徳実行の動機・目的は、「利己」における「利」をまったく離れたものであることが強調されているが、一方で、「天爵を修めて人爵これに従う」（『論文』⑨一九九頁）とあり、品性完成の結果として、「利己」における「利」に結びつく説明も多くなされている。

「モラロジーは品性完成の科学にして最高道徳の理解及び実行によりてその目的を達成す」（『論文』⑦三頁）とあり、最高道徳実行の目的は品性にある。したがって、最高道徳における真の「利益」は品性であり、その「利益」により「自己」自身が変革する。

(1) 「この宇宙の内容はこれを科学的に観れば、一つの系統をなして森羅万象みな連絡しておるのであります。特に地球上の生物は、ただにその形体の連絡せるのみならず、その生活機能もまた互いに連絡しておるのであります」(『道徳科学の論文』①一〇六頁)、「すべて生物はみな地球上に発生して、宇宙自然の勢力に支配せらるるものであることは、今日にてはあえて科学の力を借らずとも明白なる事実であつて、(中略)そこで人類もまた自然界における生物の一種なるが故に、その勢力に支配せらるることはもちろん当然のこと」(同 一三七、一三八頁)、「人類はただに自然の勢力に支配せらるるだけでなく、更にまた社会の勢力に支配せらるる」(同 一四八頁)

(2) 「自己の現在の境遇を適者生存の法則に適うように改善すべし」ということを合理的に教うるのがモラロジの主な目的であります」(『論文』①一四一頁)、「神に一致する人間の最高品性の形成は、まずこれを自己より始むるを要す」(⑦一七六頁)

(3) 「そもそも人間の成立を考ふるにこれを宗教的にいへば、極めて最初の人間の霊はみな同じ神の分霊で、を信じて居るのであります。もとより哲学の専門家から見たらば不完全な信仰でしょうが、しかし一般の素人や實際上からの考察は、かえつてこちらが確かなような感じが致しますから、私どもはかように信じて居つて、本体論の研究は専門家に御任せ申し上げたいのであります」(『廣池千九郎日記』②一六九、一七〇頁、大正八年)

(4) 「人間の自己保存の本能は、絶えずその境域を超えて利己の本能に進みおるもの」(『論文』①序一〇頁)、「先方を傷つけて、自分の快を食らんとする利己主義の精神」(⑨三五一頁)、「一切の衆生は無知にして三毒のいづれかに囚われ、ただ自己保存及び自己發達の利己心及び利己的行動のほかないのであります」(⑦七五頁)、「人心これ危うく道心これ微かなり」(①序二頁、⑦二〇六頁)、「そもそも自我の没却とは、自己の不完全なる先天的及び後天的原因に基づけるところの自己の精神を棄却して、神へ本体」の本性をすなわち自然の法則に適合するように改心することです」(⑦一九二頁)

(5) 「忠誠に努力して要求せず」(『論文』⑨三二六頁)、「自ら苦勞してこれを人に頒つ」(同 三一八頁)、「道徳

その肉体はこの宇宙の一部分たる幾つかの原子の結合したもので、それが物理的・科学的及び生理学的に組み立てられたものでしょう」(『論文』⑦一五三頁)、「唯心論・唯物論及び心身相制説(もしくは因果説)より精神物理的並行説に至る」(『論文』②三二一四〇頁)、「今日にては心身の関係に対する学説としては、並行論が比較的穩当なるものとせらるるようになって」(同三四頁)、「信仰は物心同時併存説であるようですし、また天理教も同様であるように考えられます。即ち「物あれば則あり」靈物不離の信仰です。欧州でも古来、こういう風の二元説(Dualism)はたくさんあるようですが、しかし専門家の説によれば、二元説や多元説(Pluralism)は、漸次に一元説(Monism)に向かつて進むので、宇宙の根本実体は一元より出發するに相違ないということは、専門哲学者の考えであるようです。而して我々もまたさように考えぬでもないのであります。しかしながら主観的哲学的ではさうであつても、今日我々が実験的に研究してみれば、一元の何たるやはいまだ容易に分かぬのであるから、我々はしばらく實際的な物心同時併存、並行の二元説

は犠牲なり相互的にあらず」(同 三九五頁)

(6) 「第一卷第一章(二二ページ)その他に「道徳は利己心の上に築かれたるものでなければならぬこと」を述べてあります。しこうして、ここに「利己心」というのは「法華経」にいわゆる「己利」と同一の意味であつて、この利己心は普通の利己の本能とは異なるのであります」(『論文』①二九頁)、「己利を速得し(眞に自己を利益する原理を覚ること)」(⑤三二四頁)、「妙法蓮華経」序品の中に「己利を速得す」という語ありて、聖人の教えにおいては自己の最高品性を完成することが自己を利することになると教えられておる」(⑧四一頁)、「元來人間の幸福実現は人間の品性を完成することにあるのですから、聖人はその品性を完成することを「己れの利益を心に得た」と申しておる」(①七六頁)、「本文に「己利」とあるはすなわち自己の利益と云ふことでありますが、この自己の利益と云ふことが現代人のいわゆる利己主義とは異なるのであります。すなわち聖人のいわゆる利己主義は最高道徳によりて自己の最高品性を完成することでありませぬ。この自己の品性完成のほか、自己の利益となるものはないのであります」(⑤三三〇頁)

### 三、動物行動の利己と利他

本章では Richard Dawkins の『利己的な遺伝子』(日高・岸・羽田・垂水訳、1991、紀伊國屋書店)を一つの手がかりとして、動物行動の利己と利他について考察する。

ドーキンスの「利己的遺伝子」理論は、動物行動や遺伝情報の仕組みについての、種々の新しい事実をその基礎として築かれている。その理論は、新しい概念と新しい方法によって表現された、ダーウィンの生物進化説である。<sup>(7)</sup> その考え方の基礎には、人類にとつての「進化論」の重要性の認識があり、その理論は、生命の単位、あるいは進化(淘汰)の主体を、個体や個体群や種から自己複製子へ移したということで、生命観の新しいパラダイムの一つであるといえる。

それは、「利己的遺伝子」および「延長された表現型」という二つの考え方を基礎とする生命観であり、利己と利他、自己と他者、生命個体としての人間、人間の自己意識、文化などの存立の基礎について、多くの新しい視点や問題を提示する。

進化の理論の重要性は、その視点が、自己の存在に解釈の道を開き、生きることの意味を与えることである。進化の視点は、生きる意味についてのあらゆる種類の問いや社会生活のあらゆる面ともかかわっている。

『利己的な遺伝子』(ドーキンス)における、「生物進化」および「動物行動の利己と利他」にかかわる記述の要点をまとめると次のようになる。

(1) 利益の標準は、「生存の機会」である。つまり、自己の生存の機会を増加する行動が利己的行動であり、他の生存の機会を増加する行動が利他的行動である。したがって、自然淘汰によって進化してきたものは

すべて利己的ではなく<sup>(9)</sup>である。

(2) 自己利益(淘汰)の基本単位は、種でも、集団でも、個体でもなく、それは遺伝の単位、つまり遺伝子<sup>(10)</sup>である。遺伝子の利己性という基本法則によって、個体の利己的行動および利他的行動の両者を矛盾なく両立するものとして説明できる<sup>(11)</sup>。

(3) 自然淘汰の単位としての遺伝子(自己複製子)は、DNA分子そのものではなく、長い世代にわたって続くような染色体物質の一部と定義する<sup>(12)</sup>。それは交叉によっても破壊されない遺伝単位である<sup>(13)</sup>。遺伝子を、意識をもつ目的志向的なものと考えてはならない。しかし、それは盲目的な自然淘汰の働きによって、あたかも目的をもって行動するかのように仕立てられている<sup>(14)</sup>。

(4) 自然淘汰によって選ばれるのは遺伝子であり、生物個体の体は遺伝子の生存機械である<sup>(15)</sup>。

(5) ダーウィンの「最適者生存」は、安定なもの生存というさらに一般的な法則の特殊な例であり、したがって、遺伝子生存機械(生物個体)の行動方針は進化的に安定な戦略である<sup>(17)</sup>。生命体(よく統合された体)は、利己的な遺伝子の進化的に安定したセットの産物である<sup>(18)</sup>。

(6) 遺伝子は他の体に宿る自分自身のコピーをも援助することができる<sup>(19)</sup>。利己的遺伝子の基本法則から逸脱することなく、個体の利他的行動、個体間の協力や相互扶助も、遺伝子の利己性の結果として理解することができる<sup>(20)</sup>。

(7) 遺伝子だけを基礎として、現代人の進化を理解することはできない<sup>(21)</sup>。人間の特異性は、「文化」という言葉に要約できる<sup>(22)</sup>。文化伝達の単位(文化伝達の自己複製子)をミームと名づける<sup>(23)</sup>。観念のミームは脳と脳の間で伝達可能な実体として定義できる<sup>(24)</sup>。

人間は自己を産み出した利己的遺伝子に反抗して、純粋な利他主義を計画的に育成し実行することもできる。<sup>(25)</sup>

(8) 一つの遺伝子の表現型効果は、一般には、それが属する生物体に及ぼす効果のすべてとみなされている。しかし、遺伝子の表現型効果は、それが世界に及ぼすあらゆる効果として考える必要がある。遺伝子は、それが属する体に及ぼす効果だけでなく、外界に及ぼすあらゆる表現型効果によっても淘汰される。<sup>(26)</sup>

遺伝子は直接に淘汰されるのではなく、代理人(表現型効果)によって判定され淘汰される。<sup>(27)</sup>

(9) 個体としての生物体は、遺伝学的には、はっきりと定義できる一つの単位である。それは、一つの単位として意志決定する主体である。<sup>(28)</sup>しかし、体は遺伝子のヴィークル(乗り物)であって、それ自身では複製しない。<sup>(29)</sup>

統合された多細胞生物体は、はじめは独立していた利己的自己複製子に対して自然淘汰が働いた結果として現れてきた現象である。<sup>(30)</sup>

動物行動の「利益」が「生存の機会」であり、自己の「利益」を増加する行動が利己的行動であるとする、自然淘汰によって選択され進化してきたものはすべて利己的ではなくである。

ドーキンスの「利己的遺伝子」説によると、そのような意味で、自己利益(淘汰)の基本単位となるものは、生物種でも、個体群でも、個体でもなく、それは遺伝子(長い世代にわたって続きうる染色体物質の一部)である。つまり、動物行動の利己と利他を区別する「己」の究極の単位は、遺伝子であるということになり、通常利益を求め、利益を受ける主体と考えられている生物個体は、自然淘汰の結果として統合された安定した遺伝子の「生存機会」であるということになる。

「利己的遺伝子」説の主眼は、動物の利己的行動の説明よりも、利他的行動を、利己的行動と両立するものとして矛盾なく説明することにある。その説明原理として、遺伝子の利己性という基本法則が採用された。

しかし、遺伝子はその行動により直接に淘汰されるものではない。それは、その遺伝子による表現型効果によって判定され淘汰される。そこで、ドーキンスは、さらに「延長された表現型」という概念を導入して、生物の行動(利己的、利他的)と進化を説明した。利益(淘汰)の究極の単位を遺伝子とすることによって、一方で、意志決定し組織体として行動して直接に淘汰の対象(主体)となる個体の概念を拡張することが必要になったということもできる。

ドーキンスの説では、「利益」を求める究極の「己」の概念として、極度に狭められた遺伝子を採用するが、一方で、遺伝子の生存機会(乗り物)として自ら意志決定し行動する「生物個体」を、はっきりと定義できる一つの単位として認めている。<sup>(28)</sup>また「延長された表現型」という概念によって、たとえばビーバーの湖までをビーバーの遺伝子の表現型効果とみなし、<sup>(26)</sup>あるいは個体を多種・多数の生物個体の共生体とみる。<sup>(30)</sup>遺伝子の表現型としての個体は、そのように拡張され開かれたものとなっている。

そのような議論を徹底的に推し進めた上で、特に人間について、遺伝子だけを基礎として人間の進化を理解することはできないとしている。遺伝情報を伝達する自己複製子(遺伝子)とは別に、文化伝達の自己複製子(ミーム)を定義して、ミームを司る人間の脳(意識)には、遺伝子の独裁に叛く力があり、遺伝子から解放される進化傾向があるとしている。

利己的遺伝子と自然淘汰だけによって、これまでの人類文化の中で実現されてきた、純粋の利他主義が進化することはない。「遺伝子の利己性」という基本法則に基づいて、生命体を遺伝子の生存機会(乗り物)とする議論

を推し進めた上で、ミームの概念を導入し、ドーキンスが、人類は、遺伝子の情報を超えて、純粹で無私の利他主義をも計画的に育成し伝達することができる」と結論していることに、ここでは特に注目しておくたい。

〈注〉

(7) 「利己の遺伝子説はダーウィンの説である。(中略)それは、オースドックスなネオ・ダーウィニズムの理論的な発展であり、ただ目新しいイメージで表現されているだけなのだ。」(「利己的な遺伝子」九頁)

(8) 「ある惑星上で知的な生物が成熟したといえるのは、その生物が自己の存在理由をはじめてみいだしたときである。もし宇宙の知的にすぐれた生物が地球を訪れたとしたら、彼らがわれわれの文明度を測ろうとしてみよう。まず問うのは、われわれが「進化というものをすでに発見しているかどうか」ということであろう。(中略)ダーウィンは、この章の表題「人はなぜいるのか」のような質問をする好奇心の強い子供に、われわれが理屈の通った分別ある答をきかせてやれるようにしたのである。生命には意味があるのか？ われわれは何のためにいるのか？ 人間とは何か？ といった深遠な問題に出会っても、われわれはもう迷信に頼る必要はない。」(同一五頁)、「この本の意図は、ダーウィニズ

ムの一一般的な擁護にあるのではない。そうではなくて、ある論点について進化論の重要性を追求することにある。私の目的は、利己主義 (egoism) と利他主義 (altruism) の生物学を研究することである。学問上の興味を別にしても、この問題が人間にとって重要であることは明らかだ。それはわれわれの社会生活のあらゆる面、たとえば愛と憎しみ、戦いと協力、施しと盗み、食欲と寛大にかかわるものである。」(同一六頁)

(9) 「自然淘汰の働きかたをみれば、自然淘汰によって進化してきたものは、何であれ利己的なはずだということになる。(中略)ある実在(たとえば一頭のヒヒ)が自分を犠牲にして別の同様な実在の幸福を増すようにふるまうたとすれば、その実在は利他的であるといわれる。利己的行動にはこれとは正反対の効果がある。「幸福」は「生存の機会」と定義される。たとえ、実際の生死の見込みに対する効果がごく小さく、無視でき

そうにみえたとしても。ダーウィニズム理論の現代的説明の驚くべき結果の一つは、生存の見込みに対するささいな作用が進化に多大な力をおよぼしうることである。これは、こうした作用が影響をおよぼすのに使える時間がたつぷりあるからである。利他主義と利己主義の上述の定義が行動上のものであって、主観的なものでないことを理解することが重要である。私はここで動機の心理学にかかわるつもりはない」(同一九、二〇頁)

(10) 「淘汰の、したがって自己利益の基本単位が、種でも、集団でも、厳密には個体でもないことを論じるつもりである。それは遺伝の単位、遺伝子である。」(同三〇頁)

(11) 「遺伝子の利己性と私がよんでいる基本法則によって、個体の利己主義と個体の利他主義がいかに説明されるかを示そうと思う。」(同四頁)

(12) 「遺伝子は、自然淘汰の単位として役立つだけの長い世代にわたって続きうる染色体物質の一部と定義される。」(同五四頁)、「私は遺伝子を何代も続く可能性のある染色体の小さな小片と定義して、この本に「利己的な遺伝子」(The Selfish Gene)という表題をつけた」(同六一頁)

(13) 「遺伝子は不死身である。いや、不死身といえるに近い遺伝単位として定義される」(同六二頁)、「個体は安定したものではない。はかない存在である。染色体もまた、配られてまもないトランプの手のように、まもなくまぜられて忘れ去られる。しかし、カード自体はまぜられても生きのこる。このカードが遺伝子である。遺伝子は交叉によっても破壊されない。ただパートナーを変えて進むだけである。(中略)彼らは自己複製子であり、われわれは彼らの生存機械なのである。われわれは目的に仕えたあげく、すてられる。だが、遺伝子は地質学的時間を生きる居住者である。遺伝子は永遠なのだ。」(同六三頁)

(14) 「遺伝子を、意識をもつ目的志向的な存在と考えるはならないと強調してきた。しかし、遺伝子は、盲目的な自然淘汰の働きによって、あたかも目的をもって行動する存在であるかのように仕立てられている。」(同三三頁)、「DNAの指令は自然淘汰によって組立てられてきた」(同四五頁)

(15) 「あるとき偶然に、とびきりきわだった分子が生じた。それを自己複製子とよぶことにしよう。」(同三五頁)、「われわれはすべて同一種類の自己複製子、すなわちDNAとよばれる分子のための生存機械である」

(同四三頁)、「DNA分子は二つの重要なことをおこなっている。その一つは複製である。(中略)第二の重要なこと(中略)別の種類の分子であるタンパク質の製造を間接的に支配している」(同四六頁)、「遺伝子は人体を作りあげてゆくのを間接的に支配しており、そしてその影響は厳密に一方通行である。すなわち獲得形質は遺伝しない」(同四七頁)、「動植物は多細胞に進化した。あらゆる細胞に全遺伝子の完全なコピーが配分された。(中略)私は体を遺伝子のコロニー、細胞を遺伝子の化学工場として都合のよい作用単位、と考えたい」(同八〇頁)、「生存機械と神経系を組立てる方法を指令することによって、遺伝子は行動に基本的な力をふるっている。しかし、次に何をするかを一瞬一瞬決定してゆくのは、神経系である。遺伝子は方針決定者であり、脳は実施者である。だが、脳はさらに高度に発達するにつれて、しだいに実際の方針決定をもひきうけるようになり、そのさい学習やシミュレーションのような策略を用いるようになった。どの種でもまだそこまではいっていないが、この傾向がすすめば、論理的にはけっきょく、遺伝子が生存機械になった一つの総合的な方針を指令するようになるであろう。つまり、われわれを生かしておくのにもっともよいと思う

あるだろう。」(同四一頁)

(20) 「自分が利益を得るために必ずしもライバルを倒す必要はないのだ。利己的遺伝子の基本法則から逸脱することなく、基本的に利己的な世界においてさえ、協力や相互扶助がいかにして栄えるのかを、われわれは理解することができる。」(同三五八頁)

(21) 「現代人の進化を理解するためには、進化を考える際に遺伝子だけをその唯一の基礎と見なす立場を、まず放棄せねばならない」(同三〇五頁)

(22) 「人間をめぐる特異性は、「文化」という一つの言葉にはば要約できる。」(同三〇一頁)

(23) 「新種の自己複製子が最近まさにこの惑星上に登場しているのである。私たちはそれと現に鼻をつきあわせているのだ。それはまだ未発達な状態にあり、依然としてその原始スープの中に不器用に漂っている。しかしそれはかなりの速度で進化的変化を達成しており、遺伝子という古参の自己複製子にはるか後方に遅れあえていっているありさまである。新登場のスープは、人間の文化というスープである。」(同三〇六頁)、「文化伝達の単位、あるいは模倣の単位という概念を伝える名詞(中略)模倣に相当するギリシヤ語の語根をとれば <mi meme>と <μῆμημι>なる(中略)上記のギリシヤ

ことを何でもやれ、という命令を下すようになるであろう。」(同九九頁)、「自然淘汰によって選ばれるのは、環境をもっとも有効に利用するように自分の生存機械を制御していく遺伝子である。」(同九九頁)

(16) 「ダーウィンの「最適者生存」は、じつは安定なもの生存というさらに一般的な法則の特種な例である」(同三一頁)

(17) 「メイナード・スミスが提唱している重要な概念は、進化的に安定な戦略 (evolutionarily stable strategy) とよばれるもの(中略)「戦略」というのは、あらかじめプログラムされている行動方針である。」(同一一四頁)、「進化的に安定な戦略すなわちESSは、個体群の大部分のメンバーがそれを採用すると、べつの代替戦略によってとってかわられることのない戦略だと定義できる。」(同)

(18) 「よく統合された体が存在するのは、それが利己的な遺伝子の進化的に安定したセットの産物だからである」(同四〇頁)

(19) 「重要なのは、遺伝子が他の体に宿る自分自身のコピーをも援助できるらしいという点である。もしそうであれば、これは個体の利他主義としてあらわれるであろうが、それはあくまで遺伝子の利己主義の産物で

語の語根を <ميم (meme)> と縮めてしまうことにする」(同)

(24) 「『觀念のミーム』は脳と脳の間で伝達可能な実体として定義されるはずなのである。」(同三二三頁)、「私の同僚のN・K・ハンフリーが、本章の初期の原稿を手ぎわよく要約して指摘してくれているように、……ミームは、比喩としてではなく、厳密な意味で生きた構造と見なされるべきである。」(同三〇七頁)

(25) 「意識とは、実行上の決定権をもつ生存機械が、究極的な主人である遺伝子から解放されるといふ進化傾向の極致だと考えることができる。(中略)脳は遺伝子の独裁に叛く力さえそなえている」(同九九頁)、「私たちには、私たちを産み出した利己的遺伝子に反抗し、さらにもし必要なら私たちを教化した利己的ミームにも反抗する力がある。純粹で、私欲のない利他主義は、自然界には安住の地のない、そして世界の全史を通じてかつて存在したためしのないものである。しかし私たちは、それを計画的に育成し、教育する方法を論じることさえできるのだ。われわれは遺伝子機械として組立てられ、ミーム機械として教化されてきた。しかしわれわれには、これらの創造者にはむかう力がある。この地上で、唯一われわれだけが、利己的に自己複製

子たちの専制支配に反逆できるのである。」(同三二二頁)

(26) 「遺伝子間の重要な違いは、それが及ぼす効果にしかあらわれない。これは通常、胚発生の過程への、したがって体のつくりや行動への効果を意味する。」(同三七五頁)、「表現型という専門用語は、一つの遺伝子の身体的なあらわれ、つまり、遺伝子が発生を通じてその対立遺伝子との比較において身体に及ぼす効果に對して用いられる」(同三七六頁)、「一つの遺伝子の表現型効果は、通常、それが属する生物体に及ぼす効果のすべてとみなされる。これが従来の定義である。しかしわれわれは今や、一つの遺伝子の表現型効果はそれが世界に及ぼすあらゆる効果として考える必要があると思う。」(同三八〇頁)、「一つの生物個体中の遺伝子が他の生物個体の体に延長された表現型効果をもつことがありうる」(同三八五頁)、「ヒーパーの湖はヒーパーの遺伝子の延長された表現型効果であり、これらは何百ヤードも延長することができる。」(同三九七頁)、「動物の行動は、それらの遺伝子がその行動をおこなっている当の動物の体の内部にたまたまあってもなくても、その行動の「ための」遺伝子の生存を最大にする傾向をもつ。」(同四〇六頁)、「行動様式という

ものが解剖学上の器官と同様に扱いうるというローレンツの発見」(R・ドーキンス(1987)「延長された表現型」紀伊國屋書店、一七頁)

(27) 「自己複製子は直接に淘汰されることはなく、代理人によって淘汰される。すなわちそれらはその表現型効果によって判定される。」(同二二頁)

(28) 「遺伝学的に言ううと、やはり個体としての生物体は通常はつきり定義できる一つの単位であり、その細胞は互いには同じ遺伝子を、他の生物体の細胞にあるのは異なる遺伝子をもっている。(中略)生物体は、二匹の生物体とある生物体の一本の足などよりは、もっと強い意味で行動の単位である。生物体は一つのよく統合された中枢神経系をもっている。それは一つの単位として「意志決定」する。」(延長された表現型「四六四頁」)

(29) 「自己複製子は一般に、(中略)巨大な共同の生存機械、すなわちウィークルのなかに寄り集まる。われわれがいちばんよく知っているウィークルは、われわれ自身のような個体の体である。したがって体は自己複製子ではない。それはウィークルなのだ。(中略)ウィークルはそれ自身では複製しない。その自己複製子を増殖させるようにはたらく。自己複製子は行動せず、

世界を知覚せず、獲物を捕らえたりあるいは捕食者から逃走したりしない。自己複製子はウィークルがそういったことすべてをするようにしむける。」(「利己的な遺伝子」四〇六、四〇七頁)、「個々の利己的な遺伝子の目的は一体何なのか。遺伝子プール内にさらに数をふやそうとすること、というのがその答である。(中略)しかし今や、「それ」が多数の異なる個体内に同時に存在する、分散された存在だということを強調しなければならぬ。」(同四一四頁)

(30) 「異種の個体に相互利益をもたらすような関係は、相利共生と呼ばれている。(中略)彼らの結びつきがさらにもう少し密接だったなら、地衣類が二重生物だなどとは到底判別できなかったに違いない。もしそうだとすると、他にもわれわれがまだ気づいていない二重生物、多重生物がいるのかもしれない。もしかすると私たち自身もその一つかもしれない(中略)最近、このミトコンドリアは、その起源をたどると、進化のずっと初期のころにわれわれの祖先型の細胞と連結した、共生バクテリアだったのだ、という議論が説得的に展

開されている」(同二八九、二九〇頁)、「自己複製子は原理的に言えば必ずしもいっしょになっっていないなくともよいのだが、事実としていっしょになっっており、生物体の生存と繁殖において共通の利益を分かちあっている。」(「延長された表現型」四八九頁)、「自己複製子は環境が与えてくれる機会を利用する。(中略)世界は、相互に適合している成功した自己複製子の組合わせ、つまりいっしょにうまくやっていける自己複製子によって次第に植民されていく。」(同四九〇頁)、「統合された多細胞生物体は、原初的には独立していた利己的自己複製子に対して自然淘汰がはたらいた結果として現われてきた現象なのだ。自己複製子の集団行動は十分割にあつたのである。自己複製子が自らの生存を保障するための表現型産出力は、原理上、延長されているのであって、決して限界づけられることはない。しかし實際上、部分的に限界づけられた局所的集中物、すなわち、自己複製子のパワーが共有する一つの結節点として、生物体なるものが生じてきたのである。」(同四九二頁)

#### 四、生命体としての自己と非自己

本章では、「免疫の意味論」(多田富雄、1993、青土社)を手がかりに、生命体としての自己と非自己について



考察する。

免疫のシステム全体を扱うような研究は、従来の還元主義的医学・生命科学の中では見落とされる傾向があった。しかし近年、新しい視点から、また新しい技術を用いて、免疫学が急速に進歩し、免疫システムの全体が詳細に理解されるようになってきた。それと同時に、次々と明らかになる免疫系の仕組みや働きが、生命理解の本質にかかわるような新しい視点や新しい問題をも提示している。

分子生物学の進歩によって、遺伝子の面からの生命理解が深まってきたが、免疫系の仕組みは、遺伝子とは異なる面から、生命体全体の本質についての深い示唆を与える。特に、免疫は、外的および内的な環境とのかかわりの中で、全体的・包括的な、またつねに変化し続ける動的な超システムとしての、生命体の新しいイメージを提示する。

『免疫の意味論』における、免疫系の働きや身体的な「自己」についての記述の要点をまとめると次のようになる。

- (1) 免疫は、病原性の微生物だけでなく、あらゆる「自己でないもの」から「自己」を区別し、個体のアイデンティティを決定するものであり、個体の生命を理解するひとつの入り口である。<sup>(37)</sup> 臓器移植、アレルギー
- (2) 免疫とは、身体的自己と非自己である抗原が入ると、特にその抗原に対して抗体という蛋白質が作られ、抗体がその抗原に特異的に反応することと定義できる。<sup>(38)</sup>
- (3) 一億種類以上の抗原と反応できるようなレセプター（抗原受容基）を作り出すために、免疫系は例外的な遺伝子の使い方をしている。<sup>(39)</sup> 異なった遺伝子断片をつなぎ合わせるだけでなく、ほかの蛋白では絶対に

ありえない回数 of 突然変位が、特定の部分で頻繁に起こる。<sup>(34)</sup> 免疫学的な反応性だけは、一卵性双生児でも、生後の経験によればしばしば違っている。<sup>(35)</sup>

- (4) 人間一人の中には、約二兆個の免疫細胞があり、全部でほぼ一キログラムの重さになる。抗体が認識できる抗原の数は少なく見積もっても一千万種以上ある。<sup>(36)</sup>

- (5) ひとつの個体内の抗体分子は、ばらばらに存在しているのではなく、お互いに反応し合いながらひとつの連続したネットワークを形成している。<sup>(37)</sup>

- (6) 免疫は、非自己の認識と排除のために発達してきた反応系というより、自己の全一性を保証するためのものである。<sup>(38)</sup>

- (7) 免疫系は、変容する自己に言及しながら自己組織化していく動的な超システムである。超システムとしての免疫系こそ、個体の生物学的個性を決定している。<sup>(39)</sup>

- (8) 免疫の働きには、強い心因性要素がある。<sup>(40)</sup>

- (9) 遺伝子だけで自己を規定することはできない。免疫系は、たとえば内在性ウイルスと呼ばれるような寄生体も自己の中に包含するが、一方、自分の遺伝子でコードされている蛋白でも非自己と認識し免疫反応を起こすことがある。<sup>(41)</sup>

- (10) 免疫学的な自己は、固定的なものでなく、それは免疫系の行動様式によって規定される。<sup>(42)</sup>

免疫は、生命体としての自己、非自己を区別し、生命個体としてのアイデンティティを決定する。また、免疫系は、全体としてつながりをもって互いに反応し合い、多様な状況に対し、それぞれの状況に応じて多様な働きをしている。抗体分子を作り出す過程では、ほかの蛋白ではあり得ない回数 of 突然変位や遺伝子の組み替えが起

こっている。また、免疫機能は、心理状態によっても強く影響される。

生物個体としての自己は、免疫系によって、その同一性が規定され保持されているが、その「自己」は、つねに内的・外的環境によって、あらたに自己組織化し変容する。

現在では、一般に生命体としての個体は、基本的には遺伝子によって規定されるものであり、遺伝子の情報によってコードされる物質の体系が、生命体としての「自己」であると考えられているが、遺伝子によって規定される「自己」は固定的である。また獲得形質は遺伝しないから、遺伝子の情報の流れは一方的であり、遺伝子によって規定された「自己」は、遺伝子からの情報とその影響を一方的に受け止めるだけである。

しかし、「自己」は遺伝子だけによって規定されるものではない。

免疫系の働きは、あらゆる非自己から自己を区別するから、遺伝子よりさらに明確に、また直接にその働きそのものによって、個体の生物学的個性を決定している。また、一卵性双生児でも免疫に違いがあることから、免疫は、遺伝子より強く個体の個性を規定しているといえる。

免疫は、厳格に自己と非自己を区別し非自己を排除するが、一方で免疫系そのものは、固定的なものではなく、また閉鎖的なものでもない。多様な抗原に対応するために、遺伝子のレベルで頻繁に再構成と突然変位が起こる。したがって、免疫系はその働きによって、システムそのものが全体としてつねに変容し続ける。特定の抗原に対して特定抗体が個々にばらばらに働くのではなく、個々の働きがつねに全体から影響を受け全体に影響を与えてお互いに反応し合いながらネットワークを形成している。

以上のように、免疫系の働きは、極めて個性的でありながら、一方で固定的でなく、動的で開かれた「自己」のイメージを提示する。

生命体としての「自己」を規定するものとして、遺伝子の働きと免疫の働きを比較すると、遺伝子の情報が獲得された情報（獲得形質）を受け入れることを拒絶するのに対して、免疫の働きは、心の状態の影響をも強く受けるという事実は興味深い。

### 〈注〉

(31) 「伝染病がら身を守るしくみという程度に考えられてきた免疫が、分子と遺伝子の働きで生命を理解しようとする生命科学の中心に位置するようになったのは比較的最近のことである。そればかりか、もっと巨視的な生命観にも数々の問題をなげかけている。免疫は、病原性の微生物のみならず、あらゆる「自己でないもの」から「自己」を区別し、個体のアイデンティティを決定する。還元主義的生命科学がしばしば見失っている、個体の生命というものを理解するひとつの入り口である。臓器移植、アレルギー、エイズなどの社会的問題もまた、身体的「自己」の、「非自己」との関わりの問題として考えなければならない。」(免疫の意味

を「抗原」という。「抗体」は「抗原」と特異的に反応する分子である。これが教科書に書いてある免疫の定義である。」(同五二頁)

論 八頁)

(32) 「「自己」というブラックボックスに、「非自己」である「抗原」が入ってくると、やがて「抗体」というタンパク質が作られる。「抗体」をつくらせるような物質

(33) 「一億種類以上の抗原と反応できるようなレセプターを作り出すために、免疫系は例外的な遺伝子の使用方法をしていることがわかってきた。たかだか数百個の遺伝子の断片を組み合わせることで、膨大な種類の反応性を作り出すのである」(同四四頁)、「一般に、自然界のタンパク質の立体構造は、遺伝子に書かれた情報通りに構築される。抗体の立体構造の一部が抗原に応じて変わるためには、遺伝子のレベルで何か特殊なことが起こっていないなければならない。」(同五三頁)

方もない種類の抗体分子を作り出す遺伝子のセットが作り出されるのである。」(同五五頁)

(35) 「一卵性双生児でも、免疫学的な反応性だけはしばしば違っている。それは、生後の経験、たとえば感染症などを通して違ったネットワークのボタンを形成したためである。」(同六八頁)

(36) 「人間ひとりの中には、約二兆個( $2 \times 10^{13}$ )の免疫細胞があり、ほぼ一キログラムの重さになる。脳の細胞の総数より多い。抗体分子は血清一ミリリットル中に $10^{15}$ 分子含まれ、全身には $10^{18}$ 分子存在する。抗体が認識できる抗原の数は、少なく見積もっても一千万種類以上あるだろうとされている。すなわち一千万種類もの異なった抗体分子の有機的集合体として免疫系は存在するのである。」(同六〇頁)、「これらの細胞が、脳や肝臓のような巨大な臓器を作るわけではなく、全身をめぐってはリンパ節や脾臓などの分散した中継点に戻ってくる。近代医学というのは、肝臓、腎臓、心臓、肺など臓器単位での生理的働きや病気を研究するのが中心だったので、臓器を作ることがなかった免疫系は、近代医学の中では相手にされなかったのである。」(同二二二頁)

(37) 「イエルネ(ニールス・K・イエルネ(1910-)、オ言及しながら自己組織化をしてゆくような動的システムを、超(スーパー)システムと呼びたい。言うまでもなく、マスタープランによって決定された固定したシステムとは区別するためである。超システムの概念はまだ完全には定義されていない。それを正確に規定することができれば、生物学の基本原理のひとつになるのではないかと思う。(中略)超システムとしての免疫系こそ、個体の生物学的個性を決定しているものである。」(同二〇五頁)

(40) 「アレルギーの発症には著しい心因性要素がある」(同一五九頁)、「ホメオスタシスという全体のバランス装置は三つに分けて考えられている。一つは自律神経の系統、二つはホルモン(内分泌)系統、三つは免疫の系統である。この中で三つ目の免疫系統をホメオスタシスの一つと考えるようになったのは比較的最近のことである。(中略)ホメオスタシスのシステムはこの三つの系統によって機能するが、この三つはいずれも心理状態ときわめて密接な関係をもっている。心の状態によって三つの働きが低下したり、向上したりするのである。」(石川光男、1986、『生命思考』TBSブリタニカ、一六七頁)

(41) 「人間では、それぞれの個体が持っている三十二億個

ラング人、免疫学者、1984ノーベル賞受賞者)は、ひとつの個体内に存在している抗体分子(細胞表面にあるのと遊離しているのとに拘らず)は、ばらばらに存在しているのではなくて、お互いに反応し合いながらひとつの連続したネットワークを形成している、と考えたのである。(中略)イエルネ自身は、ノーベル賞受賞講演で、チョムスキーの生成文法論をひきながら、免疫学的認識構造が、言語と同様に限られた組成のつながりによって生成してゆくことを述べている。」(同六〇頁)

(38) 「非自己」の認識と排除のために発達したと考えられてきた免疫が、実は「自己」の認識をもとにして成立していたのである。免疫は、「非自己」に対する反応系として捉えるよりは、「自己」の全一性を保証するために存在するという考えが出てくる。」(同四七頁)、「ひとつの抗原の侵入によって、ネットワーク全体の平衡状態が変化することになる。(中略)ネットワークは一度成立してしまつと、いかなる動乱が起きようと常に直前の平衡状態を基礎にして行動する。すなわち「自己」に言及しながら反応し、反応を終息させるように動く。」(同六七頁)

(39) 「私は、ここに見られるような、変容する「自己」にほどの塩基対によってコードされる物質の体系、それが「自己」であるという。しかし、免疫系が見ている「自己」は少し違う。たとえば、人間に寄生しているウイルス、ことに内在性ウイルスと呼ばれるような寄生体を、免疫系は「自己」の中に包含している。マラリアの原虫や住血吸虫さえも、人間はしばしば「自己」と同様に扱う。それに対して、自分の遺伝子でコードされている蛋白であつても、たとえば甲状腺のクロイド蛋白とか、脳神経系のミリエンと呼ばれる蛋白などを、免疫系は「非自己」として認識し、免疫反応を起こす。(中略)遺伝子だけでは「自己」を規定できない」(「免疫の意味論」二二六、二二七頁)

(42) 「昨日まで「自己」であつたものが、今日は「非自己」となり得る。それぞれの時点では「自己」の同一性というものが存在することを認めたとしても、本当に連続性を持った「自己」というものが存在するのであるか。こうして全体を眺めてみると、正確には、免疫学的「自己」というものが存在しているわけではないことがわかる。反応する「自己」、認識する「自己」、認識される「自己」、寛容になつた「自己」——というように、「自己」は免疫系の行動様式によって規定される。そうすると「自己」というのは「自己」の行

為そのものであって、「自己」という固定したものは  
ないことになる。現代の免疫学は、「自己」の行為が、  
「自己」を規定するという部分について理解しようとして  
しているのである。」(同二一九、二二〇頁)、「行為の  
集合としての「自己」。その行為を規定しているのは、  
内のおよび外的環境のみである。免疫系は、この危険

なバランスの上に成立している。その条件主義的行為  
を越えるプリンシプルがあるわけではない。しかし、  
それゆえにこそ免疫は、超システムとしての生命を理  
解するためのすぐれた素材なのである。」(同三二一、  
三三二頁)

## 五、意識の主体としての自己

生命体としての「自己」について、分子・遺伝子レベルからの研究が急速に進み、今後もさらにその方向から  
の研究は進歩し続けるものと思われる。たとえば、以上で取り上げた「利己的な遺伝子」、「免疫の意味論」など  
の基礎にある事実や考え方は、これからさらに広く理解されるようになり、多くの領域の研究、一般多数の人々  
の考え方や活動にも、一層多大な影響を与えるようになるであろう。

本章で取り上げる「自我の起原」は、比較社会学者による、(主にドーキンスの「利己的遺伝子」理論を中心と  
する新しい動物行動学に基づく)社会における個人(個体)と自我の研究である。生命体についての遺伝子・分  
子レベルからの理解や、動物行動の基本的な理解が、多細胞個体であり高度の脳神経系を備えている人間の特質  
や、その自己意識・目的意識をより明確にすることが示されていて、何よりも、人間が自覚的に意識できるよう  
な精神活動は、個々の遺伝子や細胞によるものではなく、個体としての人間において成り立つものであることを  
明確にする論理が展開されている。

「自我の起原」(真木悠介、1993、岩波書店)における、意識の主体としての「自己」にかかわる記述の要点を  
まとめると次のようになる。

(1) ドーキンスの「利己的な遺伝子」理論は、現代の動物社会学のオースドックスな総合理論を基礎に展開  
されているが、その諸説には、二つの基本的な誤りがある。その第一は、遺伝子レベルの利己性と個体レ  
ベルの利己性が混同されていること、第二には、上位システムの創発的な自律性とそれによってシステム  
の目的が重層化する仕組みが理論化されていないことである。<sup>(43)</sup>

(2) 「利己的遺伝子」説は、むしろ個体の「利他性」が普遍的なものであることを立証している。動物行動の  
起原を求めること自体が、「個体という上位システムが自律して、遺伝子の目的に反逆し、個体の自己目的  
性を獲得することがありうる」という事実<sup>(44)</sup>に議論の道を開くためのものである。

(3) 「利己的遺伝子」説の論理的な意味は、生物個体の利己性を主張することにあるのではなく、また生物個  
体が単に遺伝子の生存機械であることを論証したことにあるのでもなく、第一に、利己と利他という倫理  
の問題(愛とエゴイズムの分類)は、これを定義する主体の水準と自他を区別する境界線の引き方の効果  
にほかならないことを明らかにしたこと、第二に、個体がそれ自体、派生的な集合体であることを事実<sup>(45)</sup>  
に基づいて明確にしたことである。

(4) 生物「個体」は、普通考えられているほど自明なものではない。生成子から出発して、第一に細胞シス  
テム、さらに多細胞システムが創発されて、現在われわれが自己と思っている「個体」が生成される。こ  
の身体的な個体は、空間的にも時間的にも、重層し連環する共生系の一つの中間的な集合体である。<sup>(46)</sup>

(5) 個体が、生成子の再生産の手段として派生した現象であるとしても、個体はそれ自体を目的化する主体  
として自立する。<sup>(47)</sup>



の「真核細胞」が、相互の2次的な共生態としての多細胞生物「個体」の、複雑化してゆく組織や器官の進化を可能とする遺伝子情報の集積体となる。個体という共生系の形成ののちも、その進化的時間の中で、それは数知れぬ漂泊民や異個体からの移住民たちを包容しつつ変形し、多様化し豊穡化しつづけてきた。」(同七十二頁)、「この身体的個という位相、われわれの実体であるこの重層し連環する共生系の一つの中間的な有期の集住相である。」(同七三頁)

(47) 「個体」という生の形態が本来はドーキンスのみらとおり、生成子の再生産のメディアとして派生した現象であることは正しいだろう。けれども進化のどの時点かで、みずからの創造主にたいするこの「被造物」の逆反は起こったのである。つまり「個体」は、このかりそめの形態自体を自己目的化する主体として自立する。それが発生論的に「派生的なものだ」ということと、それが現在の時点において独立の力の中心として作動することとは別の問題である。」(同七八、七九頁)、「われわれが主題としたいのは、個体がまさしくこの「テレオノミー的な」主体性を生成子から「奪い」、個体自体のものとして確立することがあるかという問いである。」(同八四頁)

ることができぬ。」(同二二〇頁)、「なお残された重要主題は、ヒトという種が、たんに社会的動物一般ではなく、へかけがえのない個」という感覚を存立せしめるような、ローレンツのいう強意の「個体識別的な」性格の社会的動物であったということである。」(同二二〇、二二二頁)、「自己意識」は一般に、他の個体との社会的な関係において反照的に形成されるが、その文脈となる社会関係が、このように「個体識別的」である時にはじめて、それはわれわれにみるような、かけがえのないものとしての「自我」の感覚を形成するものとなるだろう。」(同二二六頁)

(50) 「延長された表現型」というコンセプトの帰結は、わたしたちの身体が、「他者」のためにもまたつくられであるということである。」(同二二九頁)、「われわれの経験することのできる生の歓喜は、性であれ、子供の「かわいさ」であれ、花の色彩、森の喧噪に包囲されてあることであれ、いつも他者から「作用されてあること」の歓びである。つまり何ほどかは主体でなく

## 六、自己意識の変革

自己自身が「何を自己と思っているか」あるいは「何を自己として他と区別しているか」という意味での「自

(48) 「主体は、主体として自己以外のものを「目的」として価値することもできる。テレオノミー的な主体」の一般的な定義は、テレオノミーを自ら設定しうることである。(中略)その設定されたテレオノミーが自己自身であることもあるし、再び自己以外のものであることもありうる。第一の場合を自己目的化、第二の場合を脱自己目的化としよう。」(同九三頁)、「哺乳類という生命の分岐の特質が、「自我」のこのようなテレオノミー的な主体化に至る進化を走り抜いてきたことと条件をもういちどふりかえってみると、それはスリリングな逆説を含んでいることが分かる。第1に哺乳、第2に保育期間の延長、第3に学習能力とシミュレーション能力、第4に群居と社会性、これら「個体」の、生成子のメディアであることからの自立と、「主体化」を生み出してきた条件は、個体の自己中心化への力であると同時に、また個体の脱自己中心化への力でもある。このことは「自我」という現象の原的「脱自我性」ともいえるべきもの根拠づけられているように思われる。」(同九六、九七頁)

(49) 「自己意識」という現象にとって一見逆説的に、「他者」こそがその起原と存立の機軸の根拠をなすことは確実であるように思われる。他者だけが自己を形成するなり、何ほどかは自己でなくなるのである。」(同四四五頁)、「個体」がそれ自体派生的なものの自立化、自己目的化であるということは、個体というユニツトもまたみずからを超えたものに向かって、テレオノミー的に開かれた存在であるということである。それがわれわれの好みからみて、「好ましい」形態であれまた「否定されるべき」形態であれ、われわれの種の内にも外にも、個体のこのような自己超越の多くの形態を事実みることができぬ。「個体」は生成子の再生産の装置として決定されてはいないし、「個体」としての束の間の形態を自己目的化するよう決定されてもいない。」(同四八、一四九頁)、「個体のテレオノミー的な主体化が、自己目的化、エゴイズムという貧相な凝固に固着してしまうことがないのは、個体のこの自己裂開的な構造のためである。個体は個体自身ではない何かのためにあるように作られている。」(同五一頁)

「自己意識」は、人類の進化と共に変革を重ねてきた。また、個人の自己意識も、その生涯を通じて大きく変化する。さらには、一人ひとりの自己意識は、場合により状況によりつねに変化しているともいえる。

あらゆる人間行動の基礎には、行動の主体としての自己についての意識と感覚がある。それは、一つひとつの細胞や遺伝子がつものでなく、多細胞体であり高度の神経系を備えた個体としての人間がつもののである。自己意識の特色は、それが一定したものでなくつねに変化するものであること、非自己との境界を明確にして内に向く傾向と、開かれていて境界を超え境界を取り除いて外を向き目的を外に求める傾向の、二方向の傾向が併存しているということである。

人間の自己意識は、境界を強め自己中心的に狭められる方向にも、外に開かれ広められ深められる方向にも進むことができる。たとえば、ケン・ウィルバーの「意識のスペクトル」(K:ウィルバー、「意識のスペクトル」[1]—意識の進化)、意識のスペクトル[2]—意識の深化、春秋社)の各レベル・各帯域の意識の段階は、それぞれに自己意識の深さ(あるいは広さ)の段階に対応している。

最高道徳実行(「己利」)の基礎となる「自己意識」は、神意に同化した無我の境地であり、それは、自他の区別を超えていて、人間が実現できる、最も広く深い自己意識であると考えられる。それは、ウィルバーの「意識のスペクトル」における「心のレベル」や、ショーペンハウエルやシュレーディングァーがその世界観の基礎としたヴェーゲンタにおける「梵我一如」(『モラロジー研究』38号、「道徳性の科学的理解」)とも、その根幹は一致するものであると思われる。

人類の意識は、大きく変革しつつある。生命の本性、一体性、相互依存関係などの理解から、全体的・包括的な見方に目が開かれ、人類の「自己意識」は、広められ深められる方向へ、確実に進みつつある。今回、本稿で取り上げた、『利己的な遺伝子』、『免疫の意味論』、『自我の起原』などの内容からも、主体としての自己がより明確に意識されると同時に、人類の「自己意識」は、より開かれて、利己・利他、自己・非自己の区別を超える方向へと進み、広がり深まりつつあることが感じられる。

## 七、己利の追究

「己利の逮得」とは、「真に自己を利益する原理を覚ること」(⑤三三四頁)であり、「己利」とは、「真の意味における進化を求め、且つその実現を図る」(『論文』⑦六八頁)こと、すなわち「最高道徳によりて自己の最高品性を完成すること」(⑤三三〇頁)である。

『道徳科学の論文』には、たとえば「無意識的な冷酷・残忍の競争より有意識的な冷酷・残忍に進む」(④六、七頁)のような記述もあり、動物的な利己心(あるいは遺伝子に支配された利己心)と人間の高度な意識から発する利己心とが区別されている。モラロジーという「自我」には、その両者が含まれている。

モラロジーという「自我」を実現しようとする「利己」と、神意に同化して品性完成を目的とする「己利」とを比較すると、目的とする「利」だけでなく、その目的の根底にある「己」の觀念に基本的な相違がある。

真に安心・平和・幸福につながる「利益」とは何かという知的・合理的な理解の問題と、その「利益」を目的とすることについて、真に納得し確信が持てるかという知的理解を超えた問題がある。

人間行動の動機と目的、またその根底にある「利益」は、自他の境界をどこに、どれだけ強く引くかによって決まる。「己利の逮得」とは、目的の転換というよりは、利己・利他を超え、神意に同化した自己意識を「追究すること」自体にあるといえる。

## 八、むすび

『論文』第三緒言第一条の「将来モラロジー研究所において引き続き研究を必要とする諸項目の概要」(①序文 二二九―一三八頁)にある三十四項目の、冒頭の三項目が、

- (1) 生物及び人間の生命の連絡に関する研究
- (2) 自然力の人間に及ぼす影響と一般生物に及ぼす影響との比較に関する研究
- (3) 自然力と人間の道徳との関係の研究

であることから、人間の在り方を、広いつながりの中で全体的・包括的にとらえる視点が、その基本として重視されていることが分かる。それはまた、人間が実行できる道徳の実質とその必要性を理解し、そのことを広く深く伝えるために、これらの三項目で示されるような視点と問題が重要視されていたことを示すものでもある。

本稿で取り上げた三つ研究と、それらに関連する多くの研究は、上記三項目の課題と深くかかわっていて、廣池千九郎が「引き続き研究を必要とする」として、意図していた方向にも、大きくその研究を進めたものといえる。これらの研究の成果を手がかりとすることによって、『道徳科学の論文』に記述されている多くの重要な事項について、理解を深め、新しい課題を見いだすこともできる。

考え行動する主体としての自己を明確に自覚して生活すること、その自己を超越して、自己を超えたものとながり、自己意識を広げること、またそれらが矛盾なく一体となる境地などについて、新しい理解と実感の道が開けつつある。

己利を速得するためには、さまざまな道があり、適切な入り口と、目的へ至る過程は、時代、場所、場合によって変わり、人によって異なる。

コンラート・ローレンツは、「愛や誠意や信頼はそれ自体善であり、憎しみや不誠実や不信がそれ自体悪である」という考えは、私たちの社会では一般に善の不足と悪の過剰が支配していることから発しているに過ぎない(K・ローレンツ(1973)『文明化した人間の八つの大罪』思索社、一五頁)と述べている。利己と利他の区別、さらには善悪の区別も、何を自己として自覚するかによって、その標準が変わる。

「己利」を求め、「利己」から「己利」への道を探るとき、人間の心が「狭い自己」の意識とその「狭い自己の利益」の観念に強く支配され縛られているときには、利己心を捨て去り、利益の観念を変え、利己を利他に転換することが強調される。しかし、心が開かれ、自他の区別が弱いものとなり、つなりが強く意識されて、自己意識が広がる方向へ進む過程では、「利」の観念にこだわるより、「己」の観念に関心が向き、自己意識を変革する道の方がより自然に受け入れられ、利己から己利への道としてより有効である。

狭く限定された自己意識を変え、憎しみを愛に、自我を慈悲に転換することには、無理があり限界がある。

人類の道徳観念の基礎が、大きく「利」から「己」の方向へ進みつつあり、今後一層その方向へ進むものと予測される。